

平成 22 年 2 月 15 日 (月)

愛媛新聞掲載

## 今治タオル 環境への配慮アピールへ

### インサイド - ビデオと

東京都のベンチャー企業が、今治タオルの生産工程で出る繊維くずからバイオエタノールを作り出す新技術の検証実験に取り組んでいる。量産化にこぎつければ染色工程のボイラー燃料に置き換えられ、四国タオル工業組合は、今治タオルのブランドイメージ向上につなげるという。期待を寄せている。

実験は、繊維からのエタノール精製技術を開発した日本環境設計(岩手県宮城野町)が実施。昨年5月、今治市衣子町4丁白の繊維会社、大和染工(青野茂則社長)に実験プラントを設置し、バイオエタノール生産や燃焼実験を進めている。

タオルの生産工程では、生地の切れ端「捨て布」や、「くず」を回収し、バイオエタノールを精製する場合と違い、廃棄物利用なので原料価格高騰などの恐れもない」と説明する。

実験でエタノールは、繊維Wp(wood pulp)に対して100%と、市(みま)域産性産課の調査によると、市内約130社からは年間約5400トンの繊維くずが出ており、計算上は1500トンのエタノール約20

## 繊維くずから燃料精製

と評されるほど、可能なことが出る。これらの繊維くずに含まれるセルロースに糖素を加水分解し、発酵させるとエタノールが精製される。日本環境設計の高麗正樹専務は「タオルなどの繊維類の廃棄はセルロース。トウモロコシなどでエタノールを精製する場合と違い、廃棄物利用なので原料価格高騰などの恐れもない」と説明する。

実験でエタノールは、繊維Wp(wood pulp)に対して100%と、市(みま)域産性産課の調査によると、市内約130社からは年間約5400トンの繊維くずが出ており、計算上は1500トンのエタノール約20

### 染色工程へ利用目指す 東京の企業実証実験中



タオルの繊維くずからバイオエタノールを作る実験プラント—今治市衣子町4丁目

「6」を生産する。同調査では年間6000トンの廃棄になることが判明。しかし、生薬コスト削減を目指す大和染工の青野社長は「リサイクル燃料を燃やして設備への付加価値が低く、価格を上げることができない。排出物取りだせばコスト削減も可能」と、採算性を追求する。生薬量の問題もある。青野社長によれば、市内繊維会社7社で使うボイラー燃料は年間40ト。青野社長はこのうち約5%程度をエタノールにしたいと考えて、繊維くずだけでは生薬量が足りない。このため、使い古しのタオルを回収する仕組みづくりなども検討中だ。

同組合の平尾浩一郎理事長は「今治ブランドは業界の一端で、環境への配慮をアピールしたい」と期待。原材料費が多額高くなったため、積極的に使用したい考えだ。

3月には実証実験が完了予定で、現在は商用プラントを設計中。全国的にも注目している。全国的にも注目している。全国的にも注目している。

(今治支社・岩田大)